空への道行き

土田かこつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空への道行き

【Ｎコード】
Ｎ５６１０Ｚ

【作者名】
土田かこつ

【あらすじ】
「一週間僕に付き合ってくれたら、痛みのない方法で君を殺してあげる」
古びたビルの屋上、少女の飛び降りを引き止めた謎の男は軽薄そうな顔でそう言った……。
偶然の邂逅が少女の過去に光をあてる。
売れない作家の計画。死にたがりの少女の打算。
二人の思惑の行方はいかに。

いつか見た空の色・1

その黒い小さな箱を開けた瞬間、彼が息をのむのがわかった。
きらびやかな電飾に彩られた並木道。
傍らに並ぶベンチで、隣に座る彼の顔を見上げた。
橙の柔らかな明かりが横顔を照らし出す。

手渡したばかりの小箱の中には、銀の十字架のネックレスがあるはずだ。
クリスマスにかこつけた、彼への初めてのプレゼント。
もちろんちゃんと男物で、デザインもそれほど派手じゃないものを選んだつもりだった。
だが。
ふたに右手をそえた彼は箱の中身を見つめたまま動かない。
怪訝と言うより不安になる。
もともとネックレス自体は自分の選択ではなく彼のリクエストだったのだが。
好みに合わなかったのだろうか。

「シルバーのクロス、欲しいって言ってたでしょう？」

見かねて声をかけると、彼は大きくため息をついて顔を上げた。
吐き出された呼気が白い。

「つけていい？」

こっちが頷くよりも先に、長めの鎖を頭からかぶるようにして首

にかけた。
深緑のセーターに銀色がよく映える。
シンプルな形も線の細い彼にあっていた。
「なかなか様になってるじゃん」
ほっとして少し笑う。
彼はネックレスを確かめるように俯いた。
「ん、ありがと」
つと、彼の手が伸ばされた。
髪にごみでもついてたか、とぼんやりと見送った腕は視界の横を通りすぎ、気づけば体を引き寄せられた。
「！」
呼吸が近い。
息がつまって言葉が出ない。
体が熱を上げていく。
自分の心臓の音ばかりがうるさく、彼の鼓動が感じられない。
「…ちょっ、と」
みじろぎしようにも抱きすくめた腕はゆるがない。
油断した。
普段から態度や口ぶりこそ積極的だが、彼が直接に触れてくることはなかった。
せいぜい制服の上から捕まれるか髪の毛をかき回すくらいがいいところで、手をつないだこともない。歩くときは必ず人一人分間を

あけていた。
もどかしくも心安い距離感を、これまでずっと保ってきたのに。
「あおい」
声が少しだけくぐもって耳に届く。
「なんか、ちょっと泣きそう」
「馬鹿」
甘えをふくんだ声が少しだけ情けなくて笑った。
ようやく体から力が抜けて、彼の肩にあごをのせる。
「うん。馬鹿だなぁ」
ため息とともに吐き出された言葉が冷たく耳をくすぐって消えていった。

寒かった。
街中がむやみやたらにきらきらしていた。
でもそれが苦にならないくらいには自分も浮かれていた。
そんな季節。
今は、昔の。

憂鬱な月曜日・1

ぼんやりと白い、うす曇りの空を見上げて少女はため息をついた。

休み明けの月曜日、気だるい空気がただよう平日の昼下がり。

おそらく、はたからすれば気まぐれに授業をサボった女子高生が暇をもてあましているように見えただろう。

彼女が腰掛けているのが、古びたビルの屋上の錆びた鉄柵でもなければ。

そこは駅前通りから離れた町のはずれにある、開発から取り残された古いビルだった。

もともと電子部品メーカーの自社ビルだった。会社は倒産したものの建物は放置され、そのまま用途のないオブジェのように町に居座り続けた。

もっとも、最近では肝試しの子どもたちやじゃれつく場所を探すカップルによって新たな需要を得ていたようでもある。

少女は柵の外に投げ出した両足を揺らしながら空を見ていた。

その顔に思いつめたような表情はない。ただ何かをふっきったような目で空をながめていた。

（私が飛び降りたら）

ここは危ない場所として再び封鎖されることになるのだろうか。

子供たちから秘密の遊び場を奪ってしまうのはしのびないかな、なんて考えが頭をよぎって苦笑した。

しかたない。
どうしようもない。
どうでもいい。
乾いたあきらめが感情を支配していく。

視線を下に落とす。
見慣れたローファーのはるか先、コンクリートの地面。
彼女の最後の目的地。
もう一度顔を上げ、白い空を焼き付けてまぶたを閉じる。
そのまま何もない中空に身を躍らせようとかかとで鉄柵を蹴りつけ、

「！」

瞬間、身体に衝撃が走った。
予想していた浮遊感はない。
地面に打ち付けられた？　まさか。
こんなに意識が残るはずがない。痛みもない。
第一、感じた力が前へではなくうしろへの。
困惑する少女の頭上で誰かがため息をつく気配がした。

「落ちたら痛いぞ？」

頭のすぐ上から聞こえたのは、的確なようでひどく的はずれな言葉だった。

飛び降りようとした瞬間に少女を後ろから抱きよせて引き止めた男は、そのまま抱えあげて柵の内側におろしてしまった。

下から見えたからね、間に合ってよかったよ。
どこか真剣味にかける口調であっさりと言われて唇を噛む。

エレベーターは動かない。下から階段で上ってくるにはそれなりに時間がかかるはずだ。
そんなに長い時間、空に見とれていたのか。
あの古い非常階段を音もなく駆け上がれるはずもないのに足音さえ気づかなかった。
そんなに自分の意識に気をとられていたのか。

「なんでとめたの」

理由なんて聞いても意味はない。通りすがりのお人よしに決まってる。
わかっていても言わずにはいられなかった。

「んー。可愛い女の子がいなくなるってのは世の中にとって結構な損失だろう？」

状況に似合わぬ軽口に、あらためて男を見る。
ダークグレーの長いコート。
中のセーター靴も、目深にかぶったつばの広い帽子もすべて黒に近い灰色だ。
肌も浅黒い。夕闇の中にいたら保護色になって見えなくなってしまいそうだ。
顔は若く見えるが、どこか時代がずれたような格好だった。

「おとなしいね、君」

黙ったままの少女に男が笑いかける。

「こういうの止められた人って、正直もっと抵抗するものだと思ってた」
「別に。死ぬのなんていつでもできる」
少女は目をそらしてそっけなく言った。
止められたことは腹立たしいが、こうなった以上ことを荒立てずにすませるべきだろう。
警察や家に連絡がいくようなことになれば二度目がやりにくくなる。
幸い男はあまり生真面目なタイプではなさそうだ。
騒がなければきっとこの場を切り抜けられる。そう算段をつけた。
だが。
「じゃあさ。一週間だけ僕に付き合ってくれないかな」
緊張感のない声が少女の期待を裏切った。死にぞこないにどんなナンパだ。
呆れた少女が突き放すより先に、男が低くささやいた。
「一週間付き合ってくれたら、痛みのない方法で君を殺してあげる」
軽い口調はそのままの物騒な物言い。
だが、少女にはこの上なく魅力的な条件で。
しかめた顔を覗き込む男の表情は軽薄そうなくせにどこか底知れない。
「自殺の手助けは犯罪でしょう」

口をついてでた言葉は自分でも言い訳めいていて。
新手の詐欺にでも引っかかったような気分で相手をにらんだ。

憂鬱な月曜日・2

立ち話もなんだから、と連れてこられたのは路地裏の小さな喫茶店だった。
黒ずんだレンガ造りの店内は薄暗く、コーヒーと煙草の匂いが漂う。
男は慣れた様子で店に入り、少女に席をすすめた。
注文をとりにきた店員が去るのを見送って、しびれを切らしたように少女が口を開く。

「結局、あなたは何なの」
「んー、通りすがりの吸血鬼、かな」

こともなげに返ってきた言葉はあまりにも突飛で、少女は眉をひそめて男を見る。

「……は？」
「信じない？」

意味がわからない。冗談にしても脈絡がなさすぎる。
少女の目は明らかに不審なものを見るようで。
露骨な反応に男は肩をすくめたてあっさりと言いかえた。

「月傘既望。しがない物書きさね」
「ツキカサ、キボウ？」

少女は怪訝な声をを出した。どこかで聞き覚えのあるような名前

だった。
しかし、既望と名乗る男の顔は記憶にはない。
「小説家？」
もっとも物書き、つまり作家なら名前だけを知っていてもおかしくはないかもしれない。
考え直して軽く首を振る。
「君の名前は？」
「佐野葵」
しかたなく名乗った少女、葵はしかめた顔で既望を見た。
まだ本来の用件を聞いていない。既望は頷く。
「それでさ。今書いてるのに死にたがりの女の子が出てくるんだけど、どうも筆が進まなくて。話を聞かせてもらえないかな、と」
間に合ってよかったよ。
笑って言ったあの言葉は「助かってよかった」ではなく「取材相手が捕まってよかった」という意味だったのか。
助けられたのが不満だったはずなのに、それはそれで妙に癪に触って葵は眉間のしわを深くした。
「本当に殺してくれるの」
「ちゃんとつきあってくれたらね」
「どうやって」
いらだちもそのままに言いつのる。
結局、既望の口車にのる形でここまできてしまったが、望みどお

り最後まで面倒をみてくれるかどうかは正直かなりあやしい。
しかも痛みのない方法で、と既望は言った。
いったいどうするつもりなのだろう。
何か薬でも使うつもりなのか。まさか本当に血を吸うわけでもないだろうに。
できるなら死んだ後であまり事件になるようなことは避けたかった。
既望は少し驚いた顔をして、ふっと息を吐くように笑った。

「それは秘密」

からかう口調は相変わらず。
人を食った笑顔もそのまま。
だが、細めた目の奥にさっきまでとは違う色を見た気がした。

（この、顔）

見知らぬ男の顔のはず。
なのにその表情は葵がよく知るものに似て。
問いただすことも忘れて葵は息をのんだ。

からかうような笑顔の、その目の奥に一瞬浮かんだ違う色。
何かを抑えるような。こらえるような。あきらめにも似た何か。
見慣れぬはず既望の顔に呼びおこされたのは、葵が記憶から追い出すことのできなかった少年の面影だった。
いつも調子のいい口ぶりと人懐っこい笑顔の少年が、不意打ちのようにのぞかせた表情。気づくか気づかないかのほんの一瞬浮かんで消える。
既望の顔立ちは彫が深く肌も浅黒い。

記憶の中の少年は線が細くて色も白い。
顔のつくりはまるで違う。
なのに、表情のつくりが同じなのだ。
見るものにかすかな痛みを抱かせる目の色。
葵が、その意味を知ろうとしてついにかなわなかった……、

「お待たせしました」

ふいに、第三者の声が葵の思考をさえぎった。
店員がコーヒーと紅茶とそれぞれの前においていく。
コーヒーカップを引き寄せた既望の顔をうかがえば、そこにはさっき見た色はかけらもない。

（見間違い、か？）

馬鹿みたいだ。
仮に目の前の男が似た表情を見せたからといってそれが何だというのだ。

既望は手帳を開き、じゃあ改めて、と口を開いた。

「それで、動機はなんだったんだろう」
「さあね。空が綺麗だったから、とか」

既望は少し目を見張り、それからおかしそうに笑った。

「なかなか詩的でいいけど、ちょっと読み手が納得しないかな」

葵の投げやりな調子を気にするふうもない。
さっき見せた一瞬の目の色以外、既望の表情はほとんど変わらな

かった。
からかうような笑み。せいぜい軽く驚いてみせるくらいだ。
どうしたら違う顔をあらわすだろうか
同情でも引いてみようか。

「彼氏が死んだからとかならいいの」
「へえ、それは大きいな」

既望が少し身を乗り出した。
葵が引けたのは同情ではなく興味だけだったらしい。
落胆というほどでもない落胆。苛立ちの形にならない苛立ち。
かすかに波立った感情を、大きく息を吐いて落ち着ける。

（まあ、いい）

ただの取材。
結局は他人事。
既望がその態度をつらぬくなら、こちらもただ情報を提供すればいい。
どうせ切り捨てて置いていくだけの記憶だ。
最低限満足させて殺してもらえばいい。
過剰な同情よりよほどわずらわしくないだろう。
既望が感情をはさまないというのなら、こちらも感傷は交えない。

「まあ、実際は彼氏でも何でもないけど」
「付き合ってたわけではないのかい？」
「死んだときには」

そう。彼が死んだとき、葵はただの他人だった。
その少し前までは四六時中隣にいたとしても。

「彼も自殺？」
「交通事故。左折してきた車にひかれたの」
葵はもっとも、と付け加えて苦笑した。
「信号無視したのは車じゃなくてそいつのほうだって言うから、実際事故だったのかもわからないんだけど」
「それはいつの話かな」
「前の春休みの終わり」
「三ヶ月前か」
既望は考え込むように体を引いた。
「ただの後追い、という感じではなさそうだね」
妙にきっぱりとした物言いに葵は眉をひそめて身構えた。
何をいうのだろう、この人は。
「彼が死んで、だけど縁はすでに切れていて、なおかつ事故からもだいぶ時間がたっている」
葵の顔をのぞきこむ。
「どうして今、死のうと思ったんだろう？」
彼が死んだから、だけでは理由にならないと。
後追いなどというステレオタイプの説明では納得できないと。
共感も同情も哀れみも用いずに、事実を追う口調で動機を探ってくる。

葵自身が気付きもしなかった感情の裏側。

唐突に、低く鈍く柱時計が鳴った。

針が三時を差している。

「じゃあ、これは宿題だな」

話を切り上げるように既望は言った。

このあと用事があるという。拍子抜けした葵の顔をのぞきこむ。

「もっとしゃべりたい？」

「まさか」

解放してくれるなら願ってもない、とあくまで突き放そうとする葵に笑う。

「それは残念。じゃあ、悪いけどあとはよろしく」

既望は薄い財布から千円札を抜き出してテーブルに置くと席を立った。

去りぎわ、顔だけをむけて付け加える。

「また明日も頼むよ」

いつか見た空の色・２（前書き）

回想です。

いつか見た空の色・2

そもそものきっかけはなんてことはない。
高校に入ってクラスで席が近かっただけだ。

「後藤、空です。よろしく」

振り向いて自己紹介をした前の席の男の子に葵は目を瞠った。
綺麗な顔をした子だな、と思った。
地毛だという茶色い髪に、同じく色の薄い目。肌も白い。
整った顔立ちで一見冷たそうだが、笑うと形の違う二重まぶたに愛嬌があった。
綺麗な子だな、と思った。
華奢に見えるから好みは割れるだろうが、かなりモテるタイプだろう。
関わると面倒そうだな、と思った。

ただ出席番号が近かっただけ。接点はない。
席が変われば自然に離れていくだろう。
とくに警戒はしなかった。
ところが。

「さーのさんっ」

やたらと明るい声に呼ばれてため息をつく。
振り向けば調子のいい笑顔で空が歩いてくる。

「これから帰り？」

「委員会」
「ありゃ残念」

そっけない返事に大げさな落胆の声が返ってきた。
そのまま歩き出した葵の横にちゃっかりと並ぶ。
昇降口には遠回りだろうとじと目で隣をうかがえば、まんまと目が合ってしまった。
ここのところ万事こんな調子だ。
顔を見れば声をかけてくるし、ひとりと見ればやってくる。
同じ図書委員になった楠本敬司が空の友人だったというのがまたまずかった。
放課後、貸し出し当番のときにまで必ず顔をだしにくる。
二人にまきこまれる形で話し込み、司書の先生に注意されたこともある。
それはそれで楽しくなかったわけじゃないけれど。

正直、一緒にいると疑わしげな女子の視線を感じることが少なくなかった。
ただでさえ人付き合いは得意じゃない。今はまだ不自由もしていないが、この先避けられるようなことがあれば学校生活に支障をきたす。
できればあまり目立ちたくはない。
それに。
妙に積極的な様子はあるものの、どこまで本気なのかは疑わしい。
普段からノリは軽いし照れも緊張もまったく感じられない。
葵にちょっかいを出しては反応を楽しんでいるだけじゃないのか。
明るい笑顔でさえもときどき作り物めいてみえてどこか底知れない。

下駄箱へ降りる階段を通りすぎる。

どこまでついてくるつもりだろう。

「あのさ」

しびれを切らして口を開いた。

「ふざけてんならやめてくれる？　うっとうしいから」

きょとんとした顔でこっちを見る。
丸くなった目には驚きこそあれ動揺は見られない。
やっぱり、と思う。
本気ではなかったのだろう。

「付き合う気もないくせに」

つぶやくように吐き捨てて、背を向けて歩き出す。
と。
突然何かに腕をとられて足を止めた。
空が制服の上から手首をつかんでいる。

「何、」

にらみつけようと顔を上げ、息をのんだ。
初めて見る表情だった。
淡い色の目が夕陽に透けて妙に赤い。
いつもの笑みを含まない眼差しはいやに強く、まっすぐに葵をとらえる。

「付き合って、くれんの？」

いつになく硬い声。
捕まった、と葵は唇を噛んだ。

怠惰な火曜日・1

通学電車に揺られながら、葵は窓の外に視線を向けた。
見慣れた景色が見慣れた通りに流れていく。

（もう、この電車にも乗るつもりはなかったんだけどな）

ツキカサキボウと名乗る男との奇妙な出会いから一夜。
朝、目を覚まして真っ先に感じたのは落胆だった。
生きているという事実。
つまりは昨日、失敗したということ。
絶望なんて言葉を使うほど強い感情はなかった。

（別に、死ぬなんていつでもできる）

既望に言った言葉に嘘はない。
ただ、すぐに二度目を起こせないならば、それまで目立つ行動はさけなくてはならない。
これ以上引き止められるようなことは御免だ。

だから、仕方がない。
自分に言い聞かせてもなお、学校に行くのは乗り気がしなかった。
死に損なって改めて登校するというのも馬鹿馬鹿しい。
……それに。

駅からそれて通学路の並木道にさしかかり、葵は息をつめた。
校門が近づき生徒が増えるにつれそれは起こる。
葵がすれ違うと、ふっと周囲の声がやむのだ。
通りすぎ、しばらくして後ろから密やかなざわめきが耳に届く。

（ねぇ、あの子ってさ、）

（そうそう、事故で死んだあの、）

（え、あれが？）

（えー、なんか地味ー）

（でもあれって、フラれてたんでしょ？）

事故の後、数限りなく繰り返されたやりとり。
あいつが目立つ人間だったせいで、葵まで望まずして有名人だ。
しかも、目撃者がいなかったために車にひかれたという以外詳しいことは何もわからず、様々な憶測が飛び交っていた。
葵もまたそれらの声を否定する術を持たない。
何も知らないからだ。

教室のドアをあけるとまた一瞬、音が消える。
クラスメイトは今更噂をたてることもないが、それでも微妙な距離をとっていた。
要はハレモノ扱いだ。背中に少し視線を感じる。
昨日無断で休んだから、それもまた好奇の種になっているのかもしれない。
誰も声はかけない。葵も無言で窓際の席につく。

結局、あのまま既望は去ってしまった。明日も頼むよ、と言いながら何の約束もない。
もちろん連絡先など教えていない。

（どうするつもりなのだのだろう）

もっとも、このまま会わずにすむのならその方が面倒がない。
そう思いながらも葵は妙に気にかかって、一日外を眺めていた。
それとも既望のほうはあの喫茶店で待ち合わせのつもりでいるのだろうか。

授業が終わって帰りの準備をしていると、廊下からやたらと陽気な声が響いた。

「あーおいっ」

無遠慮に高い声と呼ばれた名前に何人かが反応する。

「……杏香」

うめくように葵はつぶやいた。
幼馴染の今井杏香だ。６時限目は体育だったらしくまだジャージを着ている。
クラスメイトの間をぬうように葵の席までやってきた。
教室に入ってくるならあんな大声で呼ばなくてもいいのに。

「何？」

身構えながら聞き返す。
葵は杏香が苦手だった。
人懐っこく、世話好きで顔も広い。おまけに勘も鋭い。
タイプが全く違うのに、何故か昔から葵のことをよくかまった。
あいつが死んで、二年生になってクラスが分かれていい加減離れていくかと思ったが、いまだにちょっかいをかけていく。
確かに人見知りな葵はこれまで杏香に助けられたことも少なくない。
だが、だからこそ今の葵にとっては煙たい人物だった。
杏香は悪戯っぽく笑って葵の耳元に口を寄せる。

「男の人が正門で葵のこと待ってたよ」
「男？」

葵は怪訝そうに首をかしげた。

「つばが広くて黒っぽい帽子に長いコートの若い人。そーさな、27、8くらいの」

（まさか）

顔が急に熱を持つ。それを見て杏香は見事に誤解した。

「やるじゃん。あたしけっこー好みかも」
「そういうのじゃない」
「そお？　カオ赤いですよ、葵さん？」

興味津々、と言わんばかりの杏香の目。
葵は鞄をつかんで席を立った。

「……もういい。じゃあね」

無理やり話を打ち切って、杏香の横を足早にすり抜ける。

このまま話していたらどこまで詮索されるかわかったものではない。

「あ、ちょっと葵、ホームルームはー？」

呼び止めたときにはもう駆け出すように教室を出ていた。

「あーあーいいねぇ、モテる人は」

男友達はともかく彼氏のいない杏香は半ば本気でため息をついた。

怠惰な火曜日・2

まだ生徒の姿のない鉄製の校門前に立つ人影に、葵はため息を吐いた。

のんきに手を振る男をにらみつける。

果たして既望はそこにいた。

「……何でここがわかったの」

昨日は学校には行ってないから後をつけられたわけではないだろう。

制服を着ていたのが失敗だったか。

紺ブレザーが多い学区のなかで、薄いグレーの制服はわかりやすかったのかもしれない。

あきらめ気味に葵はそう考えたが、既望からはずれた答えが返ってきた。

「昨日、君の靴についてた葉がケヤキだったからね。ここら辺でケヤキといったら風見街道の並木道だろう？　だからそこが通学路の学校はってあたりをつけたのさ」

確かに風見街道は通学路だ。

だが昨日は家からまっすぐあのビルに向かった。並木道は通っていない。

（なんでこんな、くだらない嘘）

「あなた、変」
「物書きなんてこんなもんだよ」
慣れたことのようにあっさりと既望は言った。
手に負えない、とばかりにため息をつく。
「どうでもいいけど、こんなところまで来ないでくれる」
既望は肩をすくめた。
「仕事だからなあ」
「これも取材だっていうの」
「そうだね、高校という場所を見てみたくて。なんか理由でもなきゃ来られないだろう」
まぶしそうに校舎を仰ぎ見る。
「おもしろい場所だな。独特の空気がある。なんだか楽しそうだ」
外からするとそんな風に見えるものなのだろうか。
既望の視線を追うように降り返る。
ホームルームを終えた生徒たちの姿がちらほらと見え始めた。
既望が葵の肩を軽く押した。
「行こうか。昨日の店でいいかい？」
歩き出した葵が鞄をゆすって肩にかけた。
ちゃり、と小さな金属音が鳴る。
「それ、君の？」

鞄の持ち手につけられた銀色の鎖に目をとめて既望は言った。
「その鞄の」
持ち手につけるには鎖が長すぎるようで、何重にも巻きつけてあった。
もとはネックレスだろうか。銀の十字架が吊り下げられている。
シンプルな形だが、女の子がつけるにはやや大ぶりに見えた。
「傷だらけだね」
そう。何より目を引くのがその傷だった。
おそらく滑らかだったであろう表面に強く擦ったような無数の傷が走っている。
端が黒ずんで汚れもあるようだ。
「……形見」
ぽつり、とつぶやくように葵は言った。
「もとはこっちがあげたものだけど」
「事故の時もつけてたのか」
既望の指摘に葵は足を止めた。
「知らない」
目を伏せて言う。
傷ついた銀の十字架。

春休みがあけた始業式の日、前の担任に呼び出されて渡された。
空の保護者という人が葵にこれを渡すよう頼んだのだという。

（事故にあったときにつけていたものだそうだよ）

担任が保護者から聞いたなら、おそらくそれは事実なのだろう。
それでも葵にとって事実という実感はない。ただの伝聞でしかなかった。

葵に別れを告げ、突き放しておきながら何故ずっと手放さなかったのか。
どうして事故の時にまで身につけていたのか。
保護者が葵に渡すように言った訳は。
それは、空の意思だったのか。
何も知らない。何も見ていない。何もわからない。

答えが出ない問いを追い続けるのは消耗する。
だからもう終わらせようと決めたのに。
終わらせる過程でまた思い起こされる。
なんて、不毛。

「佐野さんは、彼のこと好きだった？」

葵の鬱屈などお構いなしに既望は質問を続けてくる。遠慮も何もなありはしない。
それでもむきになって反発するのは子供じみてる気がして、葵はつま先に視線を落とした。

「嫌われてたけどね」

遠まわしに認めたことでまたからかわれるかと身構えたが、既望は予想に反して顔をしかめた。

「嫌われてた？　どうして」

単純な驚きではない口ぶりは少し意外だった。

動機として「彼氏が死んだから」と言った時よりも反応が大きい。

事故の前には別れていたのだから別に不思議はないだろうに。

作家先生は純愛モノがお好きか。

「さあ。別れてからずっと避けられてたから。メールも電話も無視だった」

「……事故は春休みだったね。別れたのはいつごろ？」

「一月の終わり」

既望は返事のかわりにため息をついた。

どうやら昨日引こうとして失敗した同情を今更のように引き出してしまったようで。

なんとなくおかしくなって葵は小さく笑った。

いつか見た空の色・3（前書き）

回想です。平和だった日常の風景。

いつか見た空の色・3

昼休み、自分の席で弁当を取り出した葵に杏香が声をかけた。

「あれ、後藤は？」

「知らない」

「なーに、せっかく付き合ってるんだからお昼くらい一緒に食べたらいいのに」

何故か杏香は唇をとがらせる。

「別に向こうが言わないならいい」

「んなもったいない」

何がだ、と葵が返すより先に、杏香は後ろを向いて声をかけた。

「ねえ楠本、あんた後藤がどこいるか知らない？」

「あー、図書室か保健室じゃないか」

言いかけて敬司は窓の外の曇り空を見上げた。

「この天気ならここの屋上かもしれないけど」

「だってよ？」

だってよと言われてもと思ったが、ここにいても杏香につつかれるだけかもしれない。

葵は仕方なく弁当をもって立ち上がった。

一番手近な屋上へ向かう。
屋上と言えば休み時間には人気のスポットだが、葵のクラスがあるB棟の上にはめったに人が来ない。
給水タンクがあるせいで狭く、隣の棟の影になって日当たりが悪いからだ。
半信半疑で薄暗い階段をのぼる。
まあいないならいないで適当に時間をつぶせばいい。
投げやりに考えながら、葵は鉄の扉を押した。

扉の向こうで誰かが寝そべっているのが見えた。
金属がきしむ音に気づいて体を起こす。
空だった。

「……さの、さん？」

空は目を見開いて葵を見た。
純粋な驚きの表情に不意を突かれる。
ふだんの空の顔は笑うにしろ驚くにしろ、どこか意識して作っているもののように見えた。
意識をとりはらったその目は妙に無防備で、葵は息を呑んだ。

「よくわかったね」

髪の毛を直しながら笑う。
もういつもの空の笑みだ。
なんとなく寂しいような一方でほっとして、改めて空を見る。

「もう食べたの」

昼休みがまだいくらもたっていないのに食べ物を持っている様子がない。
自分も食べてからくればよかったかな、と思いながら空の隣に腰を下ろした
「昼はいつもここ？」
「最近は。天気によっては中の階段とか」
「そっか」
葵はつぶやくように付け加えた。
「明日も、来ていいかな」
「え？」
葵の言葉に空は珍しく迷うような顔になった。
失敗、したか。
葵は空から目をそらした。
「嫌ならいいけど」
「あ、じゃなくて」
返ってきたのは思いのほか強い声だった。
何か決心したように深呼吸し、あのさ、と空は切り出した。
「俺、ご飯の後って速攻でトイレ行かなきゃないんだよ。絶対お腹ゴロゴロで」
決まり悪そうに頭をかく。
「えーと。だからなんというか、それでもよければ？」

「……もしかして、それでいつも一人で食べてたの？」
「うん、まあ」

本当は気になっていた。
休み時間はクラスメイトにかこまれている空が、昼休みになるといつの間にか姿を消すのだ。
葵にも声もかけずにいなくなる。
何かあるのかと思っていたのに、蓋をあけてみれば何てあっけない理由だろう。
我慢できずに葵は吹き出した。
気まずそうな空と、妙な心配をしていた自分がおかしかった。

「ひどいな。病弱美人も楽じゃないんだぞ？」
「自分で言うな、美人とか」

すねたように唇をとがらせて、空はまたあお向けに寝転んだ。
その動きを追うように葵は空の顔を眺める。
白いな、と思った。
もちろん頭上に広がる薄曇りの空の白さに比べたら、当たり前のように色のある肌をしている。
青白いというわけでもない。
ただどうしようもなく血の気が薄いのだ。

「病気ってさ、治らないの」
「んー、なんかもう病気っていうか体質だからね」

葵の問いかけに、返ってきたのはあまり興味のなさそうな答えだった。
もうあきらめているのだろうか。病気が自分自身になるくらいに受け入れて。

「そっか」

吐き出した言葉は自分でも思った以上に沈んで聞こえた。
空も気づいたのだろう。返ってきたのは軽い調子の声だった。

「まあでも別に死ぬようなものじゃないし。ちょっと不便なだけ」
「そっか」

今度はもう少し明るい声を出せただろうか。
薄暗いのに奇妙にまぶしい白い空を見上げて、葵は目を細めた。

追憶の水曜日

黒ずんだレンガの壁にはさまれた重い扉を押しながら、葵はためいきをついた。

昨日の学校での待ち伏せに耐えかねた葵は「明日も迎えに行くよ？」という既望の言葉を全力で拒否した。

からかいまじりの押し問答の末、結局件の喫茶店で待ち合わせることに落ち着いたのだ。

一応は自分の要求が通ったはずなのに何故だか丸め込まれているような気がぬぐえない。

先についていた既望は、葵が席に着くなり尋ねる。

「どんな人だったんだい、佐野さんの彼って」

憮然とした顔の葵を気にすることもない。

……どんな。

記憶の中の少年の面影を探る。

ただ空の特徴をあげるだけなら何も難しくはない。

だってあいつは。

「目立つ奴だった」

葵が迷惑がるくらいに。よくも悪くも噂になった。

「綺麗な顔をしてた。色が白くて。髪も目も茶色くて日本人離れし

てた」

整った顔立ちと人懐っこい笑顔で一部の女子には熱狂的な人気があった。

「体が弱かった。色素欠乏ってわけじゃないけど日光に弱いみたいだった。線がほそくて、貧血で倒れたりして」

休みも多く、外の体育はほとんどサボりで一部の男子からは反感を買っていた。

「でも性格は図太かった。調子がよくていつもへらへら笑ってた。人を煙に巻くのがうまかった。腹が立つくらい」

からかう奴らを逆手に取って笑いのネタにしたりして。聞いている葵がひやりとすることも少なくなかった。

たぶん、敵も味方もどちらも多かったんだろう。

それだけ人の目も気も強く引く奴だった。

既望はただ黙って聞いている。

相手の反応がないまま言葉を連ねていくと、だんだん独り言めいてきて葵は口をつぐんだ。

空の特徴をあげるだけなら簡単だ。

きれいで病弱でお調子者。

それは確かにあいつを説明する言葉に違いない。

だけど。

きれいで病弱でお調子者。

たぶんそういう人は他にいくらでもいるんだろう。

だからそれは空そのものを表す言葉にはならない。

違う。そうじゃない。それだけじゃない。
うまく説明できない。
そもそも葵は説明できるほど空のことを知っていると言えるのか。
その本心がわからなくて自分をも投げやろうとしているのに？

「……彼は果報者だな」

静かなつぶやきに葵は顔を上げた。
からかうなら絶好の機会だろうに、いつもの人を食った笑みはそこにない。
妙にやわらかい眼差しに葵は苛立った。

「嫌いなやつに色々言われて何が果報なの」

簡単に言うな。まるで安い慰めみたいな。

「ああ、そういうことになってたんだったか」
「そういうことって」
「嫌いだって、本人に言われたのかい？」

葵は虚を突かれて既望を見た。

「わかっているのは、さけられたってことだけだろう。どうしてさけたのかはわからない。確かに嫌われたとするのが順当な考えだけど、実際のところは不明だ。彼が死んでそれを確かめる術がない」

だから、確かめられないからその順当な考えを飲み込もうとしているんじゃないか。
葵の反論を制して既望は続ける。

「彼は死んで、とりあえず君は生きてる。事実はわからないなら、自分の望むように考えてもいいんじゃないかな」

真顔で葵の目を見る。

「佐野さんは、彼に嫌われていたんだと思いたい？」

思いたいのかと聞かれれば、思うより他がないから。
なのに、既望の言葉は葵の思考にたやすく風穴をあける。
どう考えようともどう解釈しようとも自由だと？
だがそれは、あまりにも。

「都合が、よすぎる」
「駄目？」

笑い含みに聞かれても葵には答えようがない。

「小説なんか、全部都合のいいもしもの組み合わせだよ」

既望は当たり前のように確証のないもしもを肯定する。
事実でなければ信じられない。
本当かどうか確かめられないと納得できない。
だけど、真相など望むべくもないのに欲しがるのは葵のわがままだというのだろうか。
それぐらいなら都合のいいように解釈して自分自身をなだめすかすべきだと？

「まあだけど、佐野さんがそういう風に片付けられないっていうことこそが彼にとって果報なんだろうな」

考えに沈んだ葵を既望はどこかうらやむように眺めて言った。

いつか見た空の色・４（前書き）

回想です。小さな幸せの光景。

いつか見た空の色・４

「あのさ、杏香」

珍しく自分から声をかけてきた葵を、杏香は面白がるように見た。

「男物のアクセサリーとか置いてる店って知ってる？」

「どしたの、また藪から棒に」

「空が、欲しがるから」

ためらいがちに答えると、杏香がおののいたように体を引いた。

葵が自分の失言に気づいた時にはもう遅い。

そのまま振り向いて後ろの席の敬司に話をふる。

「ちょっと奥さん聞きました？　この子まさかの名前呼びですよ！」

「あー、はいはい」

葵の言葉にか杏香のノリにか敬司は呆れた顔であしらった。

「いいねぇいいねぇ春ですねぇ」

「今、真冬だけど」

「うっさい」

敬司のツッコミは速攻で切り捨てて、杏香は葵に向き直った。

「で、どんなのにすんの」

「シルバーのクロスがいいって」

「んー、ネックレスか何か？」
ふと気づいたように杏香は首をかしげた。
「でも、あいつアクセとかすんだね。ちょっと意外」
「普段はあんまりつけないみたいだけど」
クラスでもピアスをあけたりしている男子は少なくはない。
だが、空がこれまでアクセサリーを身につけているのは見たことがなかった。
葵も不思議に思って聞いてみると、空はおどけたように笑って言った。
（なんかさ、葵がくれた十字架なら願い事のひとつくらい叶いそうじゃない？）
杏香は大げさにため息をついた。
「あーあ、まったく色気づいちゃってもう。いっそペアリングでもしたらいいのに」
「それは私が嫌」
「うわひっど」
葵の即答に笑いながらも、杏香はいくつかの店の名前をあげた。

迷惑な木曜日・1

葵に聞き取りをはじめて四日目。
既望はこの日葵の友人という少女を呼び出した。
先日学校に行ったときに声をかけてきた、いかにも好奇心の強そうな大きな目をした子だ。
今井、杏香といったか。
葵とはまるで性格が違う。対照的ともいえる二人がどんな接点を持つのか興味があった。

杏香は待ち合わせの喫茶店で既望を見つけると大きく手を振った。
既望は少し驚いたように杏香を見、笑って手招きする。

「悪かったね。呼び出したりして」
「うんにゃ、こっちも聞きたいことあったし」

言いながら椅子を引いた杏香に首をかしげた。

「聞きたいこと？」
「そ。きぼーさんて葵と付き合ってるんですかーって」
「まさか」

既望は目を丸くした。
言下に否定して肩をすくめる。

「少なくとも佐野さんは認めないだろうな。何でそう思ったんだい？」

「楽しいじゃん、ネタ的に」
あっさりと杏香は言った。
困ったような顔の既望に付け加える。
「あとまあ、前に彼氏ができたときと葵の反応が似てたから」
「というと」
「何を言っても顔が赤い」
杏香はにやりと笑って言い切った。
「それはまたわかりやすい」
「だからきぼーさんにはまだ望みあるよ。がんばだ」
何故かけしかけようとする杏香に苦笑する。
「無理だろう。彼のことを忘れられないうちは」
杏香の顔から笑みが消えた。
「やっぱ、まだ駄目かあ」
「それで、その彼のことなんだが」
既望が切り出すと、突然杏香が声を張り上げた。
「ストップ！　きぼーさんて仕事なにやってるの？　マスコミ系？」
「いや、ただの売れない物書きだよ」
「小説家？」
「そう。今書いているのが行き詰っちゃってね。少し話を聞かせてもらいたいんだ」

「んじゃ、直接葵のこと出したりはしないね？」
「それはもちろん」
「ならどーぞ」

こらえきれない、というように既望は笑い出した。

「いい子だな、君は」

杏香はきょとんと既望を見、それから顔をしかめた。

「嬉しくない」
「可愛いよ」
「やっぱり嬉しくない」

既望の顔をじと目でにらんで、杏香は大げさにため息をついた。

「まあいんだけどさ。で、何だっけ」

うながされて既望は手帳を開いた。

「そうだな、佐野さんが彼にあげたネックレスのことは知ってる？」
「ああ、うん。一緒に買いに行ったから。クリスマスのっしょ？」

既望は軽く目を見開いた。

「一緒に？」
「そ。付き合ってたころはまだ素直だったのよ」
「銀の十字架というのは佐野さんが選んだのかい？」
「や、もともと彼氏のリクエストみたいよ」

そうか、と考え込むように口をつぐんだ既望は、視線を感じて我に返った。
杏香が大きな目でじっと見ている。
取材相手に観察されてたら世話がないな、と既望は苦笑した。
「どうして別れたかは知ってる？」
「んー、それがわかんないんだよな。三学期入ったらもうぎくしゃくしてたから」
杏香は大げさにため息をついた。
「クリスマスまでは二人してもっそい甘々だったのにさー」
「佐野さんは、嫌われたと思っているようだけど」
杏香は驚いたように既望を見てから渋い顔になった。
「あー……。まあ別れてからさけられてたのは確かなんだけど。あれはちょっと。んー、どうなんだろうな」
「理由がありそう？」
「彼、後藤っていうんだけどさ、あいつもともと体が弱かったのね。日光に弱いとかで外体育はほとんどでなかったし」
頼んだオレンジジュースで唇を湿らす。
「んで、ちょうど気まずくなりだしたころからさらに倒れたりとか休んだりが増えて。だからなんか冷めたっていうより、病気が悪化してすれ違ったとかじゃないのかな」
「死因は交通事故だそうだけど」
「うん。ただ夜の事故で見てた人とかもいなくて。だから一時期いろんな噂がたった」

「というと」
「いわく、事故じゃなくて自分で飛び込んだんだとか、誰かに突き飛ばされたとか。突き飛ばされたネタは結構根が深かったな。後藤がモテんの妬んだ男子か、ストーカーまがいのファンの女子かってね。でも、中でも一番有力だったのが」

上目遣いに既望の顔をのぞきこみ、声を低めて言った。

「フラれた葵が逆恨みしてやったんじゃないか」
「それは、」

二の句が告げない既望に、杏香は素に戻る。

「あの子もちゃんと否定しないからさー。たぶん嫌がらせとか相当あったんじゃないかな」
「今井さんは、その話は信じていないのかい？」
「え、や、ちょっと待ってそりゃないよきぼーさん」

杏香はあわてたように言った。

「まあね、葵はまだ好きそうだったし思いつめてなかったとはいわないけどさ。でもそんなんできるわけないんだよ。あの子の場合、そういう矛先は相手じゃなくて自分に向くの」
「確かに、佐野さんはそういうことをしそうには見えないかな」
「だからさ、むしろ危ないのは葵自身なのよ。ぶっちゃけ今でもやばいって時あるし。しずかーに自暴自棄になってるっていうか」
「見ていてわかる？」

まあねえ、と杏香は苦笑した。
少なくとも、と既望は思う。

少なくとも葵には、彼女の危うさに気づいてくれる人がいるのだ。
たとえ葵が望まなくとも。

「でも、あたしじゃ重石になんないからなー。もう完全に煙たがってるの見え見え。嫌んなる」

杏香はぼやくように言う。

「だもんで個人的にはきぼーさんに頑張ってほしいわけ」

既望をけしかけていたのはそういうことらしい。
その目的には共感しなくもないが。

「なかなか難しいな」
「んなことないと思うんだけどね」

いたずらっぽく笑って既望の顔をのぞきこむ。

「これから葵にも会うの」
「ああ、この後約束して……、来たね」

既望の言葉に店のドアを振り向く。
そこにはこれ以上ないほど顔をしかめた葵が立ちつくしていた。

「うーわ、見事なタイミング」

愚痴るようにつぶやいて杏香は席を立った。
葵は既望をにらみつけたまま目も合わせてこない。
杏香は肩をすくめて、すれ違いざまその耳にささやいた。

「このひと相手に意地張るの、むずいよ」

迷惑な木曜日・2

まだ体温の残る椅子に腰掛けるなり葵は言った。

「なんで杏香を呼んだの」

既望はわざとらしく眉根を寄せる。

「そう怖い顔をしない。可愛いのにもったいない」

「関係ない。理由は何」

「それこそ関係ないんじゃないかな。あと三日の命だろう？」

「もういい。杏香に聞く」

葵は言葉に詰まったように唇を噛んだ。

すねたような反応に既望は目を細めた。

「君は今井さんをどう思う」

葵は顔を上げた。

「今井さんには君のことを聞いたから、君には今井さんのことを聞こうかと思って。公平だろう？」

「あなただけが不公平だわ」

「それじゃあ、今井さんと話していてわかったことをひとつ」

芝居がかった仕草で葵の目をのぞき込む。

「彼女は君を心配している」
「知ってる」
苦々しげに葵は言った。
「だからうっとうしい」
「どうして？」
葵は怪訝そうに既望を見上げた。
ここで聞き返されるとは思わなかったのだろう。
「気にしなければいい。君はもう死ぬんだろう？」
「杏香がかかわると面倒くさい。……いろいろ」
「未遂のことも今回の話も今井さんにはしていないよ？」
既望の言葉は安心すべきものなのに、口調はどこか挑発じみて聞こえて、葵はその顔をにらんだ。
黙ったままの葵に既望はあっさり話題を変えた。
「じゃあもし、今井さんが君の立場なら死ぬと思う？」
「知らない」
そっけなく葵は言った。
だが今度は押し黙っても既望は話を変えようとはしなかった。
葵はため息をついた。
杏香なら。解せない疑問を残したまま、空が死んだとして。
悲しむ、ことは悲しむだろう。葵よりずっと率直に。
たぶんまっとうに悲しんで、まっとうに現実と向き合う。
空が死んだことも。疑問が解けないことも。自分が置かれた状況

をそっくりそのまま飲み込んで。
あの性格なら一人になったって孤立もしない。
そもそも、付き合っていたのが杏香なら。
別れるようなことにはならないかもしれない。
「杏香なら死なない。死ぬような状況にならない」
投げやりに、だが妙にきっぱりと葵は言った。
既望は目を見張る。
「何？」
問いただす葵に、既望はおかしそうに笑った。
「やっぱり今井さんはすごいな。尊敬してしまうよ」

いつか見た空の色・5（前書き）

回想です。

いつか見た空の色・5

葵はあくびをかみ殺し、そのまま腕を枕に机に伏せった。

ゆるく西日がさす図書室は暖房がきいていて心地いい。

葵も普段はちゃんと本を読む場所として活用しているのだが、今日は圧倒的に睡眠が足りなかった。

理由は単純。借りた本を読んで徹夜したからだ。

いつもと違うのは、その本が図書館のではなく空が気まぐれに押し付けたものだということ。

知り合いが書いたというそれを期待もせずにめくっていたら、不覚にもとまらなくなった。

読み終えて本を閉じるのとドアポストに朝刊が落ちる音を聞いたのがほとんど同時だったと思う。

貸す方と読む方。どちらが悪いと言われれば完全に読むほうの自業自得だろう。

それでもあいつのせいだど八つ当たり気味に葵は内心で空を責めた。

当の空は担任に呼び出されてここにはいない。

たぶんまた出席日数を補うためのレポートなんかの話だろう。

組んだ腕の上で寝返りを打つように頭の向きを変える

頭の中に靄がかかってとりとめもなく思考がさまよっていく。

（あんたたち、手ぇとか繋いだりしないの）

興味丸出しで聞かれたのはいつのことだっけ。
まあ杏香が葵をつつくのはもう趣味を越えて日課だから。
葵もいつもどおりつっぱねた。しない、と一言だけ。

（え、まじで？　二人のときとかもっとラブラブで迫ってくるんじゃなくて？）

目を丸くして顔を寄せる杏香に葵は体を引いた。
実際ただの照れ隠しではなく、接触は驚くほど少なかった。
からかって小突くのは頭か制服の上からがせいぜいで。
一緒に帰っても距離感は普段と変わらない。

（そんなあ、つまんなーい）

アテがはずれたとばかりに杏香は唇を尖らせる。
別にあんたを楽しませるために付き合ってるわけじゃないし。

（ね、じゃあ葵からいっちゃえば？）

再び目を輝かせて葵の目をのぞきこんできた。
だから、あんたを楽しませるためにつきあってるんじゃないんだってば。
眉根を寄せた葵に、杏香は不意打ちのように真顔になった。

（あいつ、なにげに自分が低体温なの気にしてるんじゃないかな）

一度だけ、葵の髪をくしゃくしゃにした手が耳に触れたことがある。
温度の低い耳たぶよりなおひんやりとした指先にぞくりとした。
そう。ちょうどこんな、冷たくてやわらかい……、

つと、記憶と同じ感触が首筋をなぞった気がして、葵は体を震わせた。
急激に意識が回復する。すっかり眠りこんでいたらしい。
あわてて顔を上げた。

「空？」

目の前の空は何故かひどく驚いた様子で手を引っ込めた。
苦いものを飲み込むように顔を歪め、荒く大きく息を吐く。

「……あんまり無防備だと襲っちゃうよ？」

なかば無理やりにからかうような表情を作ったが、すぐその目がそらされる。

「行こ」

そのまま背を向けて歩き出した空に葵は小さくつぶやいた。

「できるもんなら、」

やってみな、などと言えるわけもなく。
怪訝そうに空が振り向く。
葵は即座に首を横に振った。

「なんでもない」

早口に言って後を追う。

続き、があったんだろうか。
あの時すぐに起きなければ。
あと少し。空の指先が葵の体温に馴染むまで、あと少しだけ待てたなら。
そうしたら、空にあんな顔をさせないですんだんだろうか。

疑惑の金曜日・1

窓際の席を引き当てたのはせめてもの救いだった。そう葵は小さく息をはいた。

もともと空気の悪い小さな教室だ。

ただでさえ一人でいることが自然と不自然になってしまうこの場所では端の席の方が居心地がいい。

葵は机に突っ伏して、枕にした腕に顔をうずめた。

やわらかい午後の日差しがゆるやかに眠りに誘い、周りの声が遠くなる。

こうやってまどろんでいると、周囲から周囲から切り離されて本当に一人になったような気がしてくる。

とろとろとろ。

ひとりきり。

つらつらつら。

すべてを忘れ。

とろとろとろ。

何も考えない。

意識が、暗闇に沈むような感覚。

自分を、周りを、意識しなくてすむ状態。

今の葵が求めてやまないものだ。
かつては借りた本を開くのが常だったが、結局活字を追うのも気力が必要で、最近は休み時間のたびに机に伏せっている。

「佐野、」

唐突に現実に引き戻された。
葵は面倒臭げに声の主を見上げ、その顔を確認してさらに眉根を寄せる。
去年から同じクラスの楠本敬司だ。
空の、最も仲のいい友人だった。つまりは杏香と同じくあまり関わりたくない人物である。
敬司は気まずそうに言った。

「放課後、委員会あるから」

言葉の意味をはかりかねて、葵は薄目で敬司を眺めた。

「司書さんが心配してた」

司書、と言われて葵は前に選んだ図書委員に籍を置いたままだと気がついた。
もっともまともに仕事をしていたのは去年のうちだけで、2年になってからは委員会はおろか図書室に近づくこともない。

(何を今更)

興ざめだと言わんばかりに視線を外し、そう、とだけつぶやいた。
取り残されたかたちになって敬司は小さくため息をつく。立ち去る気配はない。

葵が鬱陶しげに目を向けると、少し迷ってから敬司は口を開いた。
「月傘既望って知ってる？」
葵は反射的に体を起こした
「な、」
何故、今。
何だってその名前が。
何か知っている？
何を知っている？
どうして。
頭の混乱そのままに、食い入るように敬司を見る。
「なに、それ」
敬司は目を瞬いた。
「何って、作家だけど。わりと面白い話を書く」
「作、家？」
敬司が頷くのを確認して、葵は納得すると同時に体から力が抜けるのを感じた。
妙に勘ぐったことがいかにも馬鹿らしい。
「一度見てもいいと思う。図書室にあるから」
要は図書室に来いと言いたいんだろう。
だが、それだけのためにこんな回りくどい言い方をしなくてもい

いのに。
よりによってこんな。人を混乱させるような。
葵が落ち着くのを待って敬司はつけくわえる。
「空の希望で入れたんだ」
だが、静かな声は再び葵を揺さぶっていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5610z/

空への道行き

2012年1月14日20時55分発行